

日本ロシア文学会第 60 回研究発表会

報告要旨（予稿）集

(2010 年 11 月 6 日～7 日, 熊本学園大学)

-
- A01 梶山 祐治 パステルナーク『ドクトル・ジヴァゴ』における主人公の死
A02 三好 俊介 V・F・ホダセヴィチの「たそがれ」—処女詩集に収められなかった三詩篇—
A03 大森 雅子 ミハイル・ブルガーコフの作品に見られる聖職者批判
A04 小椋 彩 レーミゾフの視覚芸術：1910-1920 年代を中心に
A05 山路明日太 レールモントフ作品における馬と人間の対照
A06 安達 大輔 ゴーゴリの「声」についての一試論
A07 粕谷 典子 『ルージン』における「客観的な語り」の模索
A08 木寺 律子 『カラマーゾフの兄弟』における星と花
A09 И. Малерова. Мотивы обряда инициации в романах «Охота на овца» Харуки Мураками и «Чапаев и Пустота» Виктора Пелевина
A10 松下 隆志 脱構築から再構築へ—ウラジーミル・ソローキンのゼロ世代の創作を巡って—
A11 ヨコタ村上孝之 ユダヤ系ロシア文学と反コスモポリタニズム運動—普遍主義再生の（不）可能性を探る—
A12 坂中 紀夫 日記と『作家の日記』—自己物語の形と機能—
B01 林田理恵, カザケーヴィチ・マルガリータ 到達度評価制度構築のための「国際基準」に準拠したロシア語総合試験開発
B02 堤正典, 小林潔 非専攻課程ロシア語教育を考える—習得基準・言語政策・IT
B03 Г. Шатохина. Марь Ванна, Сей Сеич и другие (о редуцированных формах русских личных имен)
B04 М. Томита. В современный методологический подход к обучению русскому языку как иностранному (РКИ): формирование дискурсивной компетенции
B05 丸山由紀子 モスクワ時代初期の聖者伝における双数形の用法—エビファニイ・プレムードルイとパホーミイ・ロゴフェートを中心に—
B06 М. Казакевич. Русский язык в диаспоре
B07 エフィーモワ・ゾーヤ ロシア語の慣用句“в самом деле”と“на самом деле”の使用とその日本語訳について
B08 鈴木 理奈 数量性の機能・意味的「場」と定語的表現による数量性の機能・意味的カテゴリー
C01 柚木かおり 1930～1940 年代コストロマ州の新兵の見送りの歌をめぐる社会文化的空間
C02 熊野谷葉子 新旧の資料に見られるコストロマ州のチャストゥーシカ伝承
C03 乗松 亨平 ユーリー・ロトマンの記号論における「ロシア・ソヴィエト」
C04 大塚 淑裕 バフチンの「敷居」概念の時空間的側面について
C05 平野恵美子 20 世紀初頭ロシア帝室劇場のバレエとオペラのレパートリー
C06 伊藤 愉 メイエルホリドの音楽的リアリズムについて—1926 年『査察官』の演出
C07 大野 斉子 調香師エルネスト・ボー 「シャネル No.5」の創造者
C08 小澤 裕之 20 世紀初頭のロシア文学における個性の問題—ハルムスの作品を巡って—
C09 С. Сивакова. Воскресные школы для билингвальных детей и детей-мигрантов в Токио - особенности, проблемы, перспективы
C10 宮崎 千穂 梅毒と開港場医療—1860 年前後におけるロシア艦隊による梅毒治療—
C11 有泉 和子 日露戦争に至る道第二部—三国干渉と義和団事件
D01 ワークショップ トルストイとドストエフスキー再考（諫早勇一, 鈴木淳一, 越野剛, 望月哲男）
-

日本ロシア文学会

2010 年 9 月

**Abstracts of Research Papers Accepted for Presentation at the 60th Annual Assembly
of the Japan Association for the Study of Russian Language and Literature
(Kumamoto Gakuen University, 6-7 November, 2010)**

- A01** Ю. Кадзияма. Смерть героя в «Докторе Живаге» Б. Пастернака
- A02** С. Миёси. «Сумерки» В. Ф. Ходасевича: 3 стихотворения, исключенные из первой книги стихов
- A03** М. Омори. Антиклерикализм в произведениях М. Булгакова
- A04** Х. Огура. Визуальное искусство А. М. Ремизова в 1910-20 х гг.
- A05** А. Ямадзи. Сопоставление коня и человека в творчестве М. Ю. Лермонтова
- A06** Д. Адати. Этюд к проблеме гоголевского «голоса»
- A07** Н. Касуя. Стремление к «объективному повествованию» в романе «Рудин»
- A08** Р. Кидера. Звезды и цветы в «Братьях Карамазовых»
- A09** И. Малерова. Мотивы обряда инициации в романах «Охота на овец» Харуки Мураками и «Чапаев и Пустота» Виктора Пелевина
- A10** T. Matsushita. From Deconstruction to Reconstruction: On the Works of Vladimir Sorokin in the 00's
- A11** T. Yokota-Murakami. Russian-Jewish Literature in the Context of Anti-Cosmopolitanism: A Critique of Contemporary Re-valorization of Universalism
- A12** Н. Саканака. Дневник и «Дневник писателя»: формы и функции я-нарратива
- B01** Р. Хаясида, М. Казакевич. Разработка системы интегрального тестирования по русскому языку, соответствующей мировому стандарту, с целью объективной оценки результатов обучения студентов
- B02** М. Цуцуми, К. Кобаяси. Преподавание русского языка как непрофилирующего предмета: стандарты обучения, языковые политики и информационные технологии
- B03** Г. Шатохина. Марь Ванна, Сей Сеич и другие (о редуцированных формах русских личных имен)
- B04** М. Томита. В современный методологический подход к обучению русскому языку как иностранному (РКИ): формирование дискурсивной компетенции
- B05** Ю. Маруяма. Употребление форм двойственного числа в агиографии начального периода Московской Руси: на материале текстов Епифания Премудрого и Пахомия Логофета
- B06** М. Казакевич. Русский язык в диаспоре
- B07** З. Ефимова. Об употреблении русских идиом «в самом деле» и «на самом деле» и их японских соответствиях
- B08** Р. Судзуки. Функционально-семантическое поле количественности и функционально-семантическая категория именной атрибутивной параметрической характеристики
- C01** К. Ююки. Социо-культурное пространство рекрутских припевов 1930-1940 гг. Костромской области
- C02** Ё. Куманоя. Частушечная традиция Костромской области в старых и новых записях
- C03** К. Норимацу. Образ «России» и «СССР» в семиотике Ю. Лотмана
- C04** Ё. Оцука. О хронологической стороне «порога» М. М. Бахтина
- C05** E. Hirano. Repertoire of Ballet and Opera in the Early 20th Century's Russian Imperial Theatres
- C06** М. Ито. Музыкальный реализм Мейерхольда: постановка «Ревизора» в 1926 году
- C07** Т. Оно. Парфюмер Эрнест Бо. Создатель духов «Шанель № 5»
- C08** Х. Одзава. Проблема личности в русском литературе начала XX века: исследуя Даниила Хармса
- C09** С. Сивакова. Воскресные школы для билингвальных детей и детей-мигрантов в Токио - особенности, проблемы, перспективы
- C10** Т. Миядзаки. Сифилис и медицина в открытых портах Японии: лечение сифилиса врачами русской эскадры в конце 1850-х - начале 1860 гг.
- C11** К. Ариидзуми. Путь к Русско-Японской войне (2): Тройственная интервенция и Ихэтуаньское восстание (Боксёрское восстание)
- D01** **Workshop.** Tolstoy and Dostoevsky: A New Comparison (Y. Isahaya, J. Suzuki, G. Koshino, T. Mochizuki)
-

【A01】 パステルナーク『ドクトル・ジヴァゴ』における主人公の死

梶山 祐治

『ドクトル・ジヴァゴ』の主人公ジヴァゴが物語の終盤で斃れる年号が 1929 年であることは、この小説が発表されて間もない時点ですでに指摘されていたことである。現在に至るまでこの年号に対する指摘の多くは、具体的な年号の意味を 1930 年代に入るとスターリン体制が強固なものとなっていったこととの関連で論じ、主人公の死をある種その後訪れる全体主義時代との分水嶺として捉えてきた。「ジヴァゴはその後の時代を生きることはできなかった」という考え方である。

本発表においてもこうした解釈を基本的には踏襲することとするが、報告者の狙いは、この年号の意味を上記のような作品内の歴史的な限界に置くことに留めず、「ジヴァゴの死＝物語の終わり」のさらに後に位置するエピローグ、詩篇、また作中に流れる時間の流れと関連付けて論じることで、ジヴァゴが乗り越えられなかった 1929 年の壁を様々な視点から検証し、作者パステルナークの意図を読み取ることにある。

まずはこの作品に流れている時間の流れに注目することから議論を始める。この作品の時間構造に注目すると、全編にわたって純粋に直線的なそれによって貫かれていることが分かる。小説の序盤では、未来を志向する力によって物語が展開していくが、その先にあるものとして期待されるのは希望に満ちた将来である。また、この作品では黙示録が重要なテーマとなっていることも併せて考えなければならない。黙示録はキリスト教的な時間概念を根底に持つひとつの物語でもあるが、『ドクトル・ジヴァゴ』に伏流する黙示録のテーマは、この作品に直線的な時間が流れていることと緊密に結びついている。テキストを貫く直線的な時間が収束する先にあるのは、主人公が死ぬという設定である。物語の最後に置かれるのは黙示録の終末か、それとも明るい未来か。エピローグと詩篇はそこにとどのような解釈を加え得るのか。

『ドクトル・ジヴァゴ』の執筆を始めて間もない時期、パステルナークは従妹フレイデンベルクへ宛てた手紙で、「ロシアの歴史的な姿を描きたい」ともっとも直接的な創作の動機を打ち明けている。上記の作業を通してこそ、「歴史的な姿」は主人公の死の位置付けと共に浮かび上がるはずである。

(かじやま ゆうじ, 東京大学院生)

**【A02】 V・F・ホダセヴィチの「たそがれ」
—処女詩集に収められなかった三詩篇—**

三好 俊介

詩人ヴラジスラフ・ホダセヴィチ (1886-1939) の現在入手可能な全詩集はどれも、彼自身の制作した処女詩集『青春』から始まっている。だが、彼の“本当の処女作”、つまり最初に活字になった三つの詩篇は、この『青春』には収録されていない。それらは、作者自身の判断で詩集から外されたため、今日の全詩集では巻末の補遺に追いやられ、読者の目に触れないことも多いのである。

しかし、この三詩篇を精読すれば明らかのように、どれも作品としての完成度自体は習作的な範疇を大きく超え、『青春』収載の作品と比べても見劣りしない。実際の執筆経緯を振り返ってみても、この三篇は詩人にとって習作どころか、いわば“渾身の作”であり、周囲からも一定の評価は得た作品であった。1904 年の初冬、以前から憧憬の対象だったプリューソフの招きで詩壇入りを果たした直後、高揚するホダセヴィチはそれまでの蓄積を一気に吐き出すように、これらの詩篇を書き上げ、「グリフ」出版社主セルゲイ・ソコロフに披露している。そして、詩人でもあったソコロフは、新進詩人の読みあげる作品が非凡なものであることを即座に理解し、同社の年次文集『グリフ Гриф 1905 年号』に早速掲載した。この記念すべき三作品を、なぜホダセヴィチは後に詩集から外してしまったのか。

今回の研究発表は、このような疑問を端緒に、上記三詩篇のテキスト分析や詩集『青春』との比較を試みるものであるが、この作業によって、これまで十分に留意されてこなかったホダセヴィチの一つの横顔が明らかになるはずである。ホダセヴィチの初期詩篇は、各種先行研究でも論じられる機会が少なく、また、象徴主義色の強い作品として一括りに扱われることが通例である。今回の発表の目的は、こうした研究動向を踏まえ、本来もっと複雑である初期ホダセヴィチの分析を通し、彼の全体像の理解に向けて新しい視点を提起することにある。

(みよし しゅんすけ, 電気通信大学)

**【A03】 ミハイル・ブルガーコフの作品に見られる
聖職者批判**

大森 雅子

ミハイル・ブルガーコフ(1891-1940)の諸作品には、聖職者がしばしば登場する。代表的な例としては、戯曲『偽善者たちのカバラ』(1929-36)の大司教シャロンや長篇小説『巨匠とマルガリータ』(1928-40)の大祭司カイファが挙げられるだろう。これまでのブルガーコフ研究において、両者の存在は、当時の作家を取り巻いていたソヴィエト社会を連想させるものとして、特に内務人民委員部とのアナロジーで論じられることが多かった。確かに、そのような読解も可能ではあるが、それならばなぜ、ブルガーコフが聖職者という宗教的な形象を頻りに描いたのかという疑問は、未だに解明されていない。本報告では、この問題を検討するにあたって、長篇小説『白衛軍』(1922-24)、中篇小説『運命の卵』(1924)、戯曲『逃亡』(1926-28)、『偽善者たちのカバラ』、『バトゥーム』(1938-39)、『巨匠とマルガリータ』における聖職者像を取り上げ、それらを当時の社会的・文化的コンテクストの中で分析することによって、作家独自の宗教的世界観が形成された背景を明らかにする。

上記の作品に共通して描かれているのは、否定的形象としての聖職者である。例えば『逃亡』では、大主教アフリカンが聖書の言葉を独善的に用いる様子を、白軍將軍のフルードフが皮肉っている。また『バトゥーム』では、スターリンをチフリス神学校から放校にすることこそが「善」であると説教する神学校校長が、スターリンによってからかわれている。このように聖職者が風刺的に描かれる傾向は、当時ブルガーコフが非常に関心を抱いていた反宗教プロパガンダでも多く見られた。彼が諸作品において風刺の対象としていたのは、聖職者が神の名の下に善悪の概念を都合よく解釈する態度であり、この点においては、反宗教運動の方向性と一致していると言える。

とはいえ、ブルガーコフは反宗教政策に対して批判的な立場を取っていた。それは、彼の日記の他、『運命の卵』や『巨匠とマルガリータ』からも窺い知ることができる。本報告では、聖職者批判という同時代の社会的な問題意識を共有していたブルガーコフが、「善と悪」といった宗教的・哲学的テーマにどのように取り組み、作品の中でいかに展開させていったかという点について考察する。

(おおもり まさこ、日本学術振興会特別研究員)

**【A04】 レーミゾフの視覚芸術：1910-1920年代を
中心に**

小椋 彩

レーミゾフは自らを「画家」ではなく、「絵を描く作家」と規定した。芸術家としてのこうした立ち位置は、テキストと絵がときに混交しときに補完し合う、この作家の創作の「越境性」にそのまま反映されている。よって線描画やコラージュといった視覚芸術が文学として読まれることは、作家自身の企図であったと言えるが、その反面、あたかも彼の画業が、先に成功を収めていた彼の文学の付随事項のように見做され、長らく放置されるという結果をも招いた。実際、カリグラフィーやコラージュ、ドローイングから構成される、「アルバム」と呼ばれるレーミゾフ手製の本は、複製を持たないうえ、各地に散逸しているため、実物を見るのは容易なことではない。しかし近年、資料や研究環境の整備が進められるに伴い、この方面の調査・研究にも著しい進展がみられる。本報告は、最近のレーミゾフ研究の世界的成果や動向を踏まえつつ、とくに亡命以前に創作された視覚芸術作品について、文学テキストとの対比から具体的考察を加えるものである。

レーミゾフの視覚芸術と言語芸術のあいだには、ある程度の年代的な平行関係が認められる。創作活動最初期、流刑地の北方ロシアより帰還したレーミゾフは、「民衆の神話の再創造」を掲げてフォークロアに傾倒する。秘密結社「猿類大自由院」を創設し、手書きの会員証を発行しだすのもこの頃であるが、フォークロアへの関心と研究の成果は、この会員証に如実に表れている。ところで、秘密結社はレーミゾフの死まで存続し、会員証は1930年代以降のアルバム製作の素地となったが、これがもっとも多く作成されたのは、1917年から23年までとみられる。一方、1910年代以降、作家は同時代人のポートレートを手掛けるようになるが、その多くは、1917年から、ロシアを永遠に去る直前の1921年までに集中して描かれ、これはレーミゾフの画業における一大ジャンルを成すことになった。

端的に言って、1910年代後半から亡命前後は、レーミゾフの芸術の転換期に当たる。報告では、文学と視覚芸術、両方の展開のプロセスをたどることで、その状況をより鮮明化し、レーミゾフ理解への新しい視座を得ることを目指す。

(おぐら ひかる、工学院大学)

【A05】 レールモントフ作品における馬と人間の対照

山路 明日太

発表では、レールモントフ作品において馬の表象がどのような役割を果たしているのか、馬と人間の描写の対照性に注目しながら、論じたい。

レールモントフ作品では人間の地位が引きずりおろされ、馬の地位は人の位置にまで高められている感がある。とりわけカフカスを扱う作品群において馬は、自由、幸福、郷愁など山岳民族の渴望する理念の象徴としてしばしばとりあげられている。そうしたなかで興味深いのは、ときに女性と馬とが等価のものとして比較・交換されている点である。そのさい、カフカス民族の観点から述べられる場合と西洋ロシア人の視点から述べられる場合とで異なる様相をみせる。この点に関して『バストゥンジ村』と『現代の英雄』をとりあげて分析する。そこから、前者では馬と女の対比がカフカスの生活環境を映し出すものとして機能しているのに対し、後者では西洋知識人を行動的に性格づけている、という違いがみえてくる。

つぎに、死に際しての人間と馬との描かれ方に注目する。発表では死の瞬間の描写と死体の情景に関する叙述をわけて分析する。人間が死ぬ瞬間の叙述では、魂のぬける様子が詳しく述べられることがある（『ハジ・アグレク』『イズマイル・ベイ』）。それにたいして馬の死において魂に関する描写は見あたらない。その分、死ぬ直前までの馬の勇敢な働きが強調される。このように魂があるかないかという点で、死の瞬間、人間と馬との対比は乖離をみせる。だが死骸の情景において両者の対照性はふたたび接近する。おそらく魂のぬけた“モノ”として両者が等しいからであろう。

『アズライル』の冒頭で主人公が思索に耽るさい、その背景には馬の死骸がある。しかもかれの思索のなかでは馬の死体が人間全体の死を象徴しさえする。他方『現代の英雄』では小説構成上、馬の死体が人間の死体と対照をなす。「公爵令嬢メリー」でグルシニツキーの死体とペチョーリンの愛馬の死体とが物語の最後に登場し、それらにたいして主人公は類似の反応をしめす。ふたつの死体の対照性に関して、発表ではふたつのプロットの結末という観点から分析する。両者の死体は主人公が他者を不幸にしてきた行動の結果として、象徴的に配置されているようにみえるのだ。

総じて、馬の表象の解明がレールモントフ作品に関して、より多角的な読み解きに繋がりうることを示したいと考えている。

(やまじ あすた, 中京大学)

【A06】 ゴーゴリの「声」についての一試論

安達 大輔

本発表では、ゴーゴリの語りとして想定される「声」のパフォーマンス性について考えてみたい。例えば『検察官』ではフレスタコフと市長が心ならずも初対面してしまうくんだり、「脇を向いて」というト書きが頻繁に挿まれる。このト書きを一種の作者の「声」だと考えてみる。するとこの「声」は登場人物たちを描写しているのだろうか、それとも「脇を向く」という運動を命令しているのだろうか。

エイヘンバウムが朗読のモデルを使うことではっきりさせたのは、ゴーゴリのテキストにおける文字と声のずれであり、テキストが読まれるパフォーマンスの空間である。ゴーゴリの語りを構成するアーティキュレーション、ジェスチャー、イントネーションを、「非論理的」「ザーウミ」と表現することで、エイヘンバウムはさらに、文字からゴーゴリの「声」が想像されるときには規範・権力が作用していることを示唆している。ゴーゴリの「声」とは、作者あるいは語り手の個人的な身体性に等値できるものではなく、より集合的な力である。テキストにおいて死せるもの（文字、痕跡、モノ）に生命を与え、反復・再現・再生する力である（死者が起き上がる姿はゴーゴリのテキストに偏在している）。人形のような登場人物たちを脇から小突く不気味な力（マン）あるいは運動（パールイ）、それは私たち読者が文字から「声」を想像するとき呼び起こされる権力であり、規範であり、言語であり、言説である。

ゴーゴリの「声」が力でありうるのは文字＝死の反復において作用するからであり、この力そのものは表象されない。表象されるのは常にすでに欠如を抱えたものだけだ。ここから、冒頭で述べたゴーゴリの「声」がもつパラドクスの性質が明らかになる。ゴーゴリの「声」は、記号の表象を常に力が行使される局面において行い、生成の運動の渦中に置く。言い換えれば、表象という約束は絶対に遅延される（ゴーゴリにおいて絵は自分自身からずれる）。以上のような問題を念頭に置いて、本発表では、『検察官』の問題のシーンをはじめ、ゴーゴリ作品の映像化における「声」の諸相を検討してゆく。時間が許す限りできるだけ多くの映像作品を扱うつもりだが、なかでも無声映画における「声」の扱い（コージンツェフ／トラウベルグ監督、トゥイニャーノフ脚本による 1929 年版の『外套』）には特に注意を払いたい。

(あだち だいすけ, 日本学術振興会特別研究員)

【A07】『ルージン』における「客観的な語り」の模索

粕谷 典子

1856年に発表されたトゥルゲーネフの初めての長編小説『ルージン』は、60年代以降のドストエフスキヤトリストイらによる大長編時代のさきがけとなり、当時のロシア文学全体にとっても先駆的な試みだった。トゥルゲーネフ自身、晩年にいたるまでさまざまなジャンルの作品に挑戦し続けたが、長編小説もその一環だったと考えられる。

一方トゥルゲーネフの創作過程のなかでの『ルージン』の位置を考えると、『ルージン』執筆以前までに、トゥルゲーネフはすでに30編以上の短編・中編小説を書いていた。それらの作品は『獵人日記』をはじめとして多くの場合、一人称で語られる回想体小説であった。一方『ルージン』は形式上は三人称で語られ、出来事は物語の時間内で展開していく。語り手は主人公とくに肩入れすることもなく、他の登場人物に対するのと同じように、外側から描写したり、ときに内面に軽く触れたりする程度である。

しかし『ルージン』以前の散文小説に一人称の回想体が多い事実をふまえたうえでこの作品を検討すると、一人称・回想体の語りが形を変え、あるいは他者の批評・批判にさらされながら作品内部に存在していると見ることができる。この作品においては各々の登場人物は語り手以上に自由に雄弁に、自分の人生について、あるいは他者の人生について語る。そしてルージン自身の話も、また他の登場人物の話も、主に過去の出来事を根拠にしてルージンの人物像の形成を試みる回想となっている。ルージンの語る言葉は過去の自分の人生についての回想、即ち自伝の言葉ということが出来る。それに対して他の登場人物がそれぞれ異なる観点からルージンを批評する言葉はすなわち、ルージンの一人称の自伝を相対化・客体化するものである。

トゥルゲーネフが長編に取りくんだ動機のひとつに、限定された視野と主観をもつ一人称の語りではなく、より広範な視野とテーマを扱える客観的な語りを獲得したいという目的があった。『ルージン』は短編・中編で培った一人称の語りを登場人物の言葉として基礎に据えながら、それらを互いに衝突・批判させあうことで主観性を相対化し、客観的な語りの獲得を試みた作品といえるのではないだろうか。

トゥルゲーネフが長編小説を実現するために行った語りの試行錯誤の軌跡を、ルージンの自伝の客体化という観点から分析したい。

(かすや のりこ, 早稲田大学)

【A08】『カラマーゾフの兄弟』における星と花

木寺 律子

F. M. ドストエフスキー (1821-1881) の文学作品には、自然描写はそれほど多くない。しかしその一方で、ドストエフスキー文学で自然描写がなされる場合には、それが特別な意義を持っていることになる。本発表では、晩年の大作『カラマーゾフの兄弟』(1879-1880)において、夜空や星の美しさ、草花が描写されている場面を取り上げる。

星はまず、アリョーシャが今まで以上に確固とした信仰心を得て、大地にひれ伏して神を感じる場面で描写される。また、父フョードルを殺害しようとして逃げ出したドミートリーがモークロエへ向かう場面でも、星が描写される。このようにして星は、別々の所において別の体験をしていたアリョーシャとドミートリーのこのふたつの時間が、実は同じ日の同じ時刻であったことの印となっている。星は、大切なときに離れた場所において、一時的に互いに心を通い合わせることができない状態にあったアリョーシャとドミートリーを結びつける描写である。

草花は修道院の中と父フョードルの家の庭で、多く描写されている。アリョーシャが修道院の中で大地にひれ伏す場面と、ドミートリーが父フョードル殺害を計画して父の家の庭に潜む場面でも、これらの草花が再び描写される。小説の冒頭で前もってなされていた草花の描写は、アリョーシャの信仰心とドミートリーの罪(冤罪)の瞬間に収斂していく。

『カラマーゾフの兄弟』において、ドミートリーは草花に彩られて登場することがもっとも多い人物である。華やかな草花や苺の実の描写は、彼が無実の罪に巻き込まれる遠因となった、彼の極度に高揚した精神状態を表現している。

アリョーシャは兄のドミートリーを引きとめようとせず、このためにドミートリーは父フョードルの家の庭に忍び込んで父を殺害しようとする。これがスメルジャコフによる父フョードル殺害の事件を引き起こした。アリョーシャはこの事件を「黙過」した。アリョーシャとドミートリーの同一の時間を彩るこれらの星と草花の考察が、この小説の中心的なテーマである「黙過」の問題を考える上での一助となるとよい。

(きでら りつこ, 同志社大学)

【A09】 Мотивы обряда инициации в романах
«Охота на овец» Харуки Мураками и «Чапаев
и Пустота» Виктора Пелевина

Малерова Ивона

Настоящий доклад представляет собой одну часть диссертации докладчика, посвященной сопоставительному анализу романов «Охота на овец» Харуки Мураками и «Чапаев и Пустота» Виктора Пелевина. В данном докладе мы попытаемся анализировать оба романа с точки зрения феномена инициации. По-нашему, литературные отпечатки древних обрядов инициации представляют собой одно из звеньев спаивающих оба романа. Например, в обоих произведениях ярко прослеживаются мотивы символической смерти и возрождения, временной изоляции, испытания, познания тайны и т.д., которые представляют собой центральные компоненты сценария обряда инициации.

Однако вопросом остается то, что каким путем данные мотивы в отдельные произведения проникли. Являются ли они продуманным замыслом писателя воплотить обряд инициации посредничеством повествования или простой преемственностью приёмов жанров мотивированных обрядом инициации?

Так как, мотивы инициации в обоих произведениях воплощены скорее косвенно, нашей предпосылкой является, что они в романах очутились путём преемственности. Для того, чтобы данную предпосылку подтвердить и отметить возможные жанры, ставшие катализатором обряда инициации, мы решили в первую очередь применить концепцию русского фольклориста Владимира Я. Проппа. По утверждениям В. Я. Проппа (1946) «древнейшей основой волшебной сказки» является именно «цикл инициации». Следовательно, сначала мы сравниваем оба романа с моделью волшебной сказки, после чего сопоставляем отдельные сказочные мотивы романов со сценарием инициации. Однако данный анализ показал необходимость привлечь внимание также к психоаналитической точке зрения, и поэтому, мы обращаемся к концепции коллективного бессознательного Карла Г. Юнга, и к сравнительному исследованию западных и восточных сказок японского психолога Хаяо Каваи (1982, 1995).

Результатом данного доклада является определение значения мотивов обряда инициации для отдельных романов и их взаимное сопоставление.

(Малерова Ивона,北海道大学院生)

【A10】 脱構築から再構築へ

—ウラジーミル・ソローキンのゼロ世代の創作を
巡って—

松下 隆志

現代ロシアの代表的なポストモダン作家ウラジーミル・ソローキン (1955-) は、『ノルマ』(79-83) や『ロマン』(85-89), 『青脂』(99) といった一連のコンセプチュアルな作品において、ロシアの19世紀リアリズム文学や20世紀の社会主義リアリズム文学のイメージを、スカトロロジーや人体切断、ネクロフィリアなどといったアブノーマルな表現とトラウマ的に結びつける過激な手法を用いながら、ロシア・ソ連の言説空間の脱構築を徹底的に推し進めてきた。

ところが、「現代ロシア文学のモンスター」とまで言われた作家は、新たな世紀に発表した長編『氷』(02) に始まる三部作で、自身がかつて属していた実験的な現代芸術の流派であるコンセプチュアリズムとの断絶を宣言し、またもやロシアの読者を驚かせることになった。作者自ら「失われた魂の楽園探しの物語」と銘打ったこの一大サーガでは、従来のポストモダンの遊戯性や韜晦性が影を潜めた代わりに、「原初の光」なる独自の創世神話に基づいたとあるセクトの誕生から終焉までが、ソ連と現代ロシアの裏の歴史として、無駄を排したミニマルな文体で理路整然と物語られる。ポストモダン小説から伝統的な古典小説への回帰とも取れる三部作は、作品の賛否や作者の真意を巡って批評家や読者の間に大きな論争を呼び起こした。

いわゆる「大きな物語」の脱構築ではなく、過去のロシア・ソ連のイメージを現在のロシアの社会状況と巧みに融合させながら新たな物語を再構築していくこのような手法は、ゼロ年代後半に発表された『オプリーチニクの一日』(06), 『砂糖のクレムリン』(08) という、ゼロ年代のプーチン政権に対する露骨な風刺を含んだ連作でさらなる発展を遂げた。2027年という近未来を舞台にしたこれらの作品では、イワン雷帝を想起させる皇帝が支配し、万里の長城を思わせる巨大な壁によって周囲の世界から隔離している新生ロシア帝国が、現代のロシア語に中世の教会言語や中国語をミックスしたユニークな文体でグロテスクに描かれている。また、言論統制やガス利権といったアクチュアルな問題をふんだんに盛り込んだプロットは、現在のロシアの読者にとって非常に煽情的なものになっている。

本発表では、こうしたソローキンのゼロ年代の諸作品に新しく見られる傾向・特徴の分析を行うとともに、脱構築から再構築への創作傾向の転換が意味するものを、新世紀のロシアにおけるポスト・ポストモダン文学の展開を眺めながら考察する。

(まつした たかし,北海道大学院生)

【A11】 ユダヤ系ロシア文学と反コスモポリタニズム運動
— 普遍主義再生の (不) 可能性を探る —

ヨコタ村上 孝之

コスモポリタニズムを国民国家と民族主義を解体する戦略として読み替える作業が、近年、盛んである。だが、カント、マルクス、ベック、アパイアらと主な普遍主義理論を比較してみれば、この概念は、操作概念として有効であることが疑わしいほどに多義的である。本発表は、こうした多様なあらわれのなかでも特にいびつな例である、ソビエト政府によるコスモポリタニズム批判をとりあげ、その論理と歴史的展開をたどりながら、コスモポリタニズムを民族主義へのアンチテーゼとして再生させようという現代思想の動きを批判する。

反コスモポリタニズム運動は 1940 年代終わりから 50 年代初めにかけておこり、実質的に反ユダヤ主義運動であった。コスモポリタニズムはシオニズムとほぼ同義で、ユダヤ人の非民族主義的特性を指すとされた。

これはレーニン主義におけるインターナショナリズムの対極にあったが、スターリンが 1945 年に、ロシア民族をソ連邦における模範的な民族と規定したことに発する。以後、他の民族を礼賛することは反ソ的行動とみなされるようになったが、ユダヤ人はソ連国内の特定の土地や行政区分と結びついていなかったことから、親ユダヤ的イデオロギーは必然的に反ソ的と看做された。

しかし、このことは、ハンナ・アレントの、反ユダヤ主義は国民国家の時代ではなく、その凋落とともに起こってきたのだという指摘と符合する。反コスモポリタニズム運動は、まさにソビエト連邦という多民族帝国においてのみ可能であったのだ。

ソ連においてユダヤ人はほとんどロシア文化・ロシア語に同化していたが、そのことはユダヤ民族主義を困難にした。ユダヤ社会は内なる植民地を形成していたのであり、ロシア語で執筆することは、一種のポストコロニアル的作業であった。そこで、本発表では反コスモポリタニズムと関わった何人かのユダヤ人作家の作品や思想 (P・マルキーシュ、V・グロスマン、I・エレンブルグ) において、民族と普遍 (的人間) の関係は、アイデンティティーの問題はどうなっていたのかなどを考える。コスモポリタニズムはシオニズムではなく、コロニアリズムであったとも言えよう。

近年のコスモポリタニズム再生の動きは、民族主義の超克あるいは止揚という意味しか持たないように見える。ソビエト連邦における、反ユダヤ主義としての (反) コスモポリタニズム運動は、そうした限界を明らかにし、普遍主義の幻想を払拭するであろう。

(よこたむらかみ たかゆき、大阪大学)

【A12】 日記と『作家の日記』

— 自己物語の形と機能 —

坂中 紀夫

近代的な日記を自己物語の一つとしてとらえると、その特徴的な機能として、存在論的不安の解消への寄与を指摘できる。前近代においては、個人の内面についての主観的な記述は近代におけるほど一般的ではなかった。そこでは伝統が、可能な実践・存在様式の選択肢を制限しており、行為の選択性を帰属しうる存在者を個人と呼ぶなら、その意味の限りで、そうした権能を持つ個人は成立しえなかったからである。これに対し、近代においては、伝統が存在論的な準位にまで及ぼす存在者の経験の組織化は後退し、可能な実践・存在様式の選択肢が増大する。逆にいえば、それは、社会の増大する偶有性・複雑性がもたらす過剰負担に由来して、個人が存在論的不安にさらされる蓋然性が高まることを意味する。この存在論的不安は、それに対する防衛反応として、個人に自己の同一性の再帰的な選択を迫ることになる。自己物語の一般化は、まさにこうした要請との関連において、考えられるだろう。なぜなら、自己の同一性とは、個人が生活史の観点から自らを再帰的に理解した結果として成立するものであるからだ。この理解の試みを換言したものが自己を物語る行為であり、自伝や日記はその明示化された営みである。ただし、この二つの文学形式には次のような違いがある。すなわち、自伝が現在の自己に適合する形での過去の出来事を選択・配列による総合的な自己物語であるのに対し、日記には自らが選択した存在論的規範に適合的な未来に獲得される自己像と現実自己との齟齬の意識が介在する。それゆえ、日記を書くことは、それ自体が目的への接近となる遂行的な自己物語であるといえる。

以上のように日記の特性を整理すると、それをいわば理念型としてとらえ、そこからの偏差においてドストエフスキーの『作家の日記』を性格付けることができるかもしれない。この作品は確かに旅記なども含むが、それ以上に政治や社会に関する言辭が特徴的であり、内容的に日記的であるとは言い難い。なぜなら、日記とは多分に存在論的不安に関連したメディアであるからだ。にも関わらず、彼はそれを「日記」と名付けている。この内容上の不一致を単なる逸脱とみなさないならば、政治や社会に対する発言が実存の問題につながる何らかの機序がドストエフスキーにおいて働いていると考えなければならない。ここでそうした仕組みとして指摘できるのが、ナショナリズムの働きである。(さかなか のりお、同志社大学)

**【B01】到達度評価制度構築のための「国際基準」
に準拠したロシア語総合試験開発**
林田理恵, カザケーヴィチ・マルガリータ

大阪大学外国語学部(旧大阪外国語大学外国語学部)ロシア語専攻では、ロシア連邦教育省によって開発された CEFR 基準によるロシア語能力検定試験に着目し、到達度の客観的評価システム確立へ向けた基盤整備の一環として 2000 年よりこの検定試験に準拠した統一試験の試行を行ってきた。

本学ロシア語専攻では、これら過去 8 年間の統一試験結果データ分析を基礎に、平成 20 年度科学研究費補助金(基盤研究(C)助成期間 2008-2010 年度)による助成を受け、専門語学教育としてのロシア語教育改善—効果的カリキュラム作成の重要な鍵となる到達度評価制度構築に向け、「国際基準」に準拠したロシア語総合試験開発を目的にこの 2 年間、調査研究活動を展開している。

本発表では、統一試験結果データ分析、及び 2 年間の調査研究成果について特に以下の諸点を中心に紹介する。

- 1) 2000-2008 年度に大阪大学外国語学部(旧大阪外国語大学外国語学部)ロシア語専攻で試行的に行われた 5 技能(文法・読解・聴解・作文・会話)のロシア語能力検定試験試行結果の紹介。特に、技能ごとに平均点、中央値、標準偏差値等の推移及び問題項目別難易度を分析し、学習者の技能別・問題内容別習得度と各年次教育カリキュラムとの相関性について調査・考察した結果を紹介する。
- 2) さらに、CEFR, ALTE, ТРКИ など外国語教育スタンダードに関する調査・研究により蓄積した情報を基に、本学ロシア語専攻における客観的尺度・枠組みとしての独自の到達度目標案、各学年におけるカリキュラム案の方向性について検討した結果を明らかにする。
- 3) さらにそれらの到達度目標をベースにした本学ロシア語専攻独自の「国際基準」準拠・総合試験開発の現状についても紹介したい。
- 4) 上記の諸点に加え、2009 年度に行ったロシア連邦教育省主催ロシア語能力検定試験についてのロシア本国での実施状況・問題点などの現地調査・情報収集も併せて報告する。
(はやしだ りえ, カザケーヴィチ・マルガリータ, 大阪大学)

【B02】非専攻課程ロシア語教育を考える
—習得基準・言語政策・IT

堤正典, 小林潔

日本におけるロシア語教育のかかなりの部分が大学で行われている以上、大学ロシア語教師は大学という場でのロシア語教育で何をどのように教えるか、教育内容を日々検討しておくことが求められる。また、日本の大学教育では、専攻科目としてロシア語が教授・学習されているほかに、いわゆる非専攻課程でも教育が行われている。後者は、学習時間が少ないため、より効果的な学習内容を設定する必要がある。我々は非専攻課程ロシア語教育に適した学習内容を盛り込んだ習得基準の策定を試みている。

ところで、ロシア語は単なるドメスティックな言語ではなく、国連公用語の一つであり、ロシア本国以外の国にも少なくない話者を持ち、諸国で学習されている言語である。それぞれの国の言語政策(あるいは言語教育政策)は、その国のロシア語使用や学習に多かれ少なかれ影響を与えており、受講者が学習したロシア語をその後どのように活かしていくかという将来のキャリア形成にも関わっている。したがって、ロシア語教育にかかわる者にとって、ロシア語をめぐる各国の言語政策を認識しておくことは、各自の教育内容を省みることに於いて有益である。

また、IT(情報通信技術)の発達による教育環境の変化は大きく、e-Learning に代表される IT を用いた新しい形の語学教育も導入されつつあり、ロシア語教師もそれに対応しかつ活用することが求められている。

このような状況認識に基づき、我々は、習得基準・言語政策・IT 化という観点から非専攻課程ロシア語教育の位置付けを試みたい。本報告の拠り所とするのは、CEFR(ヨーロッパ言語共通参照枠)や ТРКИ(ロシア教育科学省認定ロシア語検定)に代表される先行する習得基準、そして東アジア等での教育状況調査であり、また、現場での実践と考察である。

具体的には以下の通り。

- ・CEFR などの既存の習得基準を踏まえつつ、教授方法の具体的事例もとりあげ、非専攻課程ロシア語教育の問題点を挙げる。
 - ・台湾、韓国などの事例も参考に東アジアという場でのロシア語をめぐる言語政策と習得基準について考察する。
 - ・IT 活用の具体例として基礎語彙データベースの可能性および発展性を報告する。
 - ・上記の事柄を念頭におき、基礎教育と教養教育の問題や、学生のキャリアデザインを考慮に入れた非専攻課程としてのロシア語教育のあり方を論ずる。
- (つつみ まさのり, こばやし きよし, 神奈川大学)

[B03] Марь Ванна, Сей Сеич и другие (о редуцированных формах русских личных имен)
Шатохина Ганна

Большинству японских учащихся приходится изучать русский язык вне языковой среды, поэтому главная задача преподавателя РКИ - максимально приблизить ход урока к живой коммуникации, научить студентов понимать русскую спонтанную речь.

Нечеткость артикуляции, аллегровый темп речи, редукция отдельных звуков и сочетаний звуков делают спонтанную речь фонетически несовершенной: отдельные ее отрезки, слова редуцируются, искажаются до неузнаваемости. Особенно сильной деформации в потоке речи подвергаются слова высокочастотные, к ним можно отнести и личные имена. Уже предпринимаются попытки лексикографического описания данных форм, что в будущем послужит материалом для создания словаря редуцированных форм русской речи, который, как представляется, крайне необходим в иностранной аудитории. В качестве приложения в него могли бы войти и редуцированные формы русских личных имен, такие как *Сан Саныч*, *Вер Санна*, *Зин Севна*, *Ван Ваныч* и под.. Звучание данных вариантов русских личных имен естественнее и привычнее уху по сравнению с кодифицированными.

Знакомя японских учащихся с русскими именами собственными, стоит предложить им (на начальном этапе обучения – для простого ознакомления, а на продвинутом – и для запоминания) и редуцированные формы этих слов.

Японцы, изучающие русский язык, должны уметь воспринимать подобные формы (и зрительно, и на слух) и правильно соотносить их с соответствующими полными.

(東 (ひがし) シャトヒナ・ガンナ, 外務省研修所)

[B04] В современный методологический подход к обучению русскому языку как иностранному (РКИ): формирование дискурсивной компетенции
Томида Маргарита

В современной лингвистике утвердился термин «**дискурс**», ставший важнейшей единицей понятийного аппарата, а в лингводидактику вошло понятие **дискурсивной компетенции**. Исходя из многочисленных определений дискурса последнего времени, можно сказать, что дискурс – это речь в конкретных коммуникативных условиях, порождаемая человеком с различными личностными особенностями: этно-социокультурными, психологическими, когнитивными и др. в определённых коммуникативных целях. Говоря совсем коротко, дискурс – это то, что высказывается, с какой целью, в какой ситуации и кем высказывается. Дискурс включает в себя ситуативность и ментальность.

Дискурсивная компетенция – это способность, производить речь, адекватную данным коммуникативным целям и условиям. Если дискурс предполагает не только говорящего, но и адресата, то дискурсивная компетенция должна включать в себя и способность правильно воспринимать дискурс со всеми его компонентами.

Дискурсивная компетенция как составляющая часть общекоммуникативной компетенции становится важнейшей целью обучения иностранным языкам, в том числе и русскому (РКИ), а **формирование дискурсивной компетенции** – важнейшей задачей преподавателя РКИ.

Т.Е. Владимирова (МГУ им.М.В. Ломоносова) называет дискурс «высшей единицей обучения» в методике РКИ и подчёркивает целостное, трёхмерное представление о диалогическом бытии: «язык – речь – дискурс», вошедшее в русистику. Для формирования дискурсивной компетенции необходимо учить умению вести диалог в соответствии с этническими особенностями того или иного дискурса, национально-культурной спецификой речевого поведения.

Не следует забывать, что устный дискурс содержит и невербальные средства общения (жесты, мимику, позы), выполняющие эмоционально-оценочную, ритмическую, семантическую, иллюкативную и др. функции. Важно иметь в виду, что допустимые степень и форма воздействия на собеседника в диалоге могут существенно различаться в разных культурах.

В свете вышесказанного **роль русского преподавателя** в формировании дискурсивной компетенции, особенно в зарубежном вузе, т.е. за пределами России, трудно переоценить. Как носитель языка, русской культуры и русской ментальности, он становится бесценным проводником в мире русскоязычных ситуаций, речевого этикета, вербальных и невербальных средств общения.(...)

(富田 (とみた) マルガリータ, 早稲田大学)

【B05】モスクワ時代初期の聖者伝における双数形の用法
—エピファニイ・プレムードレイとパホーミイ・ロゴフェートを中心として—
丸山 由紀子

ロシア語(東スラヴ語)において文法カテゴリーとしての双数が失われたのは、日常文献から判断すると 13 世紀と考えられる。しかし、双数形はその後も文献で広く用いられ続けた。モスクワ・ルーシ時代(15-17 世紀)には事務行政文書や日常文献では双数形が用いられなくなり、物語ジャンルに属する文献ではその使用が希であったが、教会スラヴ語を指向する教会文献では 17 世紀末まで双数形の使用が見られた。しかしこうした教会文献においても、双数形が首尾一貫して使用されるわけではなく、双数形の使用が想定される箇所では複数形が用いられることがしばしばある。

本研究の目的はモスクワ・ルーシ時代初期に成立したオリジナル作品における双数形の使用分布とその特徴を提示することにある。分析対象文献は、この時代を代表する文筆家エピファニイ・プレムードレイとパホーミイ・ロゴフェートが執筆に携わった『ラドネシのセルギー伝』とする。

14 世紀後半に活躍した著名な聖職者にして至聖三者道セルギー大修道院の開基者であるラドネシのセルギーに関する伝記は、1418 年、同大修道院の修道士エピファニイ・プレムードレイによって著された。さらに 1448-49 年にセルギーが列聖され、聖者伝を奉神礼での使用に適合させる必要が生じると、当時大修道院に滞在していたパホーミイ・ロゴフェートがエピファニイのテキストを改変し、新たな『セルギー伝』を生み出した。

エピファニイによる『セルギー伝』のテキストは現在、完全な形では残っていない。しかし、伝存する写本にエピファニイのテキストが部分的に残されている可能性は 20 世紀初頭から指摘されてきた。1908 年、V. M. ヤブロンスキーは、16 世紀に成立したいわゆる「詳細版」(Пространная редакция)の冒頭から「О худости порт Сергиевых и о некоем поселянине」の章まではエピファニイの筆によるものという仮説を提起し、現代の研究者らもこの考えを支持している。しかし、続く「О изведении источника」から「О преставлении святого」までに関しては、パホーミイによるテキストとする研究者がいる一方で、V. M. キリリンはエピファニイの草稿段階のテキストか、後のパホーミイの手によるものか現時点では断定できないとしている。本報告では「詳細版」を 3 分割し(上記二箇所とパホーミイによって書かれた「死後の奇蹟」)、それぞれに関して双数形の用法を検討する。さらに近年 M. A. シバエフが、キリール・ペロゼロ修道院が所蔵した写本の中からパホーミイ直筆の『セルギー伝』を発見し、昨年その校訂テキストを発表した。本報告ではそれも分析対象とする。

(まるやま ゆきこ, 東京外国語大学)

【B06】Русский язык в диаспоре

Казакевич Маргарита

Нетрудно предположить, что, находясь под чужим небом, не только человек, но и его язык неизбежно будут изменяться, попав под воздействие иной культуры, иного языка. И второе предположение – вне своей естественной среды язык консервируется, например, язык «первой волны» русской эмиграции должен сохранять черты языка начала 20 века. Какое увлекательное поле для исследований! И как только у российских языковедов появилась возможность свободного передвижения по миру, началось изучение языка Русского Зарубежья.

В докладе кратко представлены главные выводы исследований, проведенных в разных странах мира (США, Европа, Израиль, Китай, Тунис и др.). Наиболее важными из них представляются следующие: о слабых частях системы русского языка; об опережающем характере изменений, идущих в диаспоре, сравнительно с языковыми изменениями в метрополии; о разрушении родной речи на тех же участках языковой системы, что и у больных афазией (универсально слабые участки языковой системы).

А что в Японии? Каковы особенности интерференции японского и русского языков, японского и русского речевого поведения? С целью выяснения этого были проведены подробные устные интервью или же письменное анкетирование 45 носителей русского языка, живущих в Японии более 10 лет и постоянно пользующихся японским языком на работе и/или в быту.

В докладе полученные материалы рассматриваются по уровням: фонетика, лексика (типы и причины заимствований), словообразование (слова-гибриды), синтаксис (калькирование, порядок слов), речевое поведение (этикетные выражения и манера ведения диалога, влияние ситуации на переключение языкового кода).

Сравнивая состояние русского языка в Японии с языковой ситуацией в других странах русскоязычной диаспоры, можно заметить и сходство, и различие. Главное, что отличает носителей русского языка в Японии, это сознательно избранная антиассимилятивная стратегия поведения, в то время как в других странах преобладает ассимилятивная установка, что, естественно, не может не влиять на языковую динамику.

(カザケーヴィチ・マルガリータ, 大阪大学)

【B07】 ロシア語の慣用句 “в самом деле” と “на самом деле” の使用とその日本語訳について
エフィーモワ・ゾーヤ

ロシア語の「в самом деле」と「на самом деле」という慣用句は、ロシア語の話し言葉にも書き言葉にも頻繁に現れるが、日本で刊行されているロシア語の文法書と教科書にはあまり記述がなく、露和辞典でもそれらの意味範囲がはっきりしていないため、ロシア語の学習者にとってその正確な使用はかなり困難である。今回の発表では、和露文学作品のパラレルコーパス、またインフォーマントへの質問に基づき「в самом деле」と「на самом деле」の使用と翻訳について報告する。

これら二種の慣用句は形式的な相似にもかかわらず、意味には大差がある。「в самом деле」はある発話が確認されたという意味成分を含むが、「на самом деле」は対立の意味成分を中心にする。以下「в самом деле」と「на самом деле」の意味範囲と日本語の翻訳を挙げる。

в самом деле:

- (1) [R. В самом деле R.] R は最初に疑念を起こさせることとして現れ、再び発話する前に話者が R は事実であることを確認している。日本語の「本当に」、「実際」に対応する。コーパスでは、「事実」、「まったくの話」という表現も現れた。
- (2) [R. В самом деле, Q.] 「в самом деле」は、判断 R の論証に論拠 Q を導く。日本語の「実際」に対応し、翻訳では「事実」も現れた。この意味では、「本当に」は使用されていないようである。
- (3) [В самом деле?] 独立の質問として、相手の言葉に疑いを表す。日本語の「本当に?」に対応し、「実際」、「事実」の使用は不可能である。
- (4) [R, в самом деле!] 話者が相手の要求への反対を強調する挿入語である。日本語の「まったく」と「ほんとうに」に対応し、「実際」と「事実」の使用はこの場合不可能である。

на самом деле:

- (1) [R. На самом деле Q.] 前に事実だと思われた発話 R と正確な発話 Q の対照を表す。日本語の「実は」、「実際は」に対応する。
- (2) [R. На самом деле Q.] Q は実際に起きたということを強調し、想像した状態 R と対照することが多い。日本語の「実際に」に対応する。

また、「на самом деле」は「в самом деле」の音声形式との相似のせいか、上述の「в самом деле」の (3) と (4) の意味でもよく使用されている。

(エフィーモワ・ゾーヤ、千葉大学院生)

【B08】 数量性の機能・意味的「場」と定語的表現による数量性の機能・意味的カテゴリー
鈴木 理奈

機能的文法学の基本的概念は言語の構造を示す機能・意味的「場」(Функционально-семантическое поле) とその根底を成す意味的カテゴリー (Семантическая категория) にある。この機能的文法学における機能・意味的「場」は、意味的カテゴリーを構成する全ての言語手段とその表現の総体を示すのに対し、機能・意味的カテゴリー (Функционально-семантическая категория) はある具体的な形態手段に基づく表現の総体を示すものと考えられる。

本研究では、文中の名詞と意味的および統語的關係を持つ従属的な語彙単位である固有の前置詞と同様の機能をはたす、数量名詞語形によって形成される前置詞相当項を考察している。これは、*дерево высотой пять метров* 等のように数量名詞、数詞、数量単位、あるいは *мобильник размером в ладошку* 等のように数量名詞、従属的成分、比較対象となる名詞を基本の構成要素として、文中で一つの統語的ポジションを取り一貫した構造を持つ統語素を成す。数量名詞語形の *высотой, с крепостью* 等は、文法的見地から前置詞的単位として位置づけられ、意味の見地においては“数”と“量”という概念による数量カテゴリーに属するものと見なされる。本研究の考察対象となる統語素の中には、数量性の意味的カテゴリーの要素となる数量名詞が含まれ、体系的な構造を形成することから、これらは数量性の機能・意味的「場」の断片を構成するものと考えられる。

機能・意味的「場」は空間性、時間性などいくつかのグループに分類され、数量性質は複数の機能・意味的「場」における考察が可能である。各々の機能・意味的「場」は互いに交差域を持つが、これは語彙を厳密にグループ分類することに難しさが生じるためと考えられる。本研究で考察する数量名詞語形による数量性の機能・意味的カテゴリー体系においては、数量性と比較カテゴリーとの関連性が見られ、数量表現の多様性が伺える。

(すずき りな、札幌医科大学)

【C01】 1930 ~ 1940 年代コストロマ州の新兵の見送りの歌をめぐる社会文化的空間

柚木 かおり

ロシアの音楽学および民俗学において、新兵を兵役に送り出す際の儀礼 (рекрутский обряд), 特に新兵と若者が村の通りを練り歩き, バラライカやガルモニの伴奏で歌う歌 (рекрутские припевки) については, その存在は 19 世紀末にすでに知られていても, 特にとりあげて研究が行われてきたわけではなかった。実質的に行われていたのは, 歌詞のみの採集である。歌詞以外を研究対象とした研究としては, ヤルイーギナによるコストロマ州コログリフ地区の演奏家を軸に置いた 2001 年の事例報告がある。

本発表の目的は, 現在は廃れてしまった当該の儀礼を, 1930 ~ 40 年代に存在した一つの文化の歴史として書き留めることである。儀礼を体験した世代が世を去っていく中, それを書き記すことは, ロシア民俗学が常に歩んできた道であり, 国は違えど現在を生きる者に課せられた急務であろう。本発表では, ロシア民俗学の弱点であった, 研究対象に近いがゆえに生じてしまう時間軸の曖昧さを取り除き, 時間軸を定め, 具体的な時代の文化の歴史として提示することを課題とする。

発表では, 1) 見送りの儀礼全般, 2) 見送りの歌およびそれが歌われる状況, 3) その代表的な歌詞, について述べる。特に, ロシアの民俗学者の仕事の補完となりえる, 1) 2) の演奏の状況に焦点を定める。

資料は, 発表者が 2001 ~ 03 年にコストロマ州ネレフタ地区で行ったバラライカ全般の調査, および 2010 年夏同地区への本発表のテーマに絞った調査 (予定。2010 年 6 月現在) で得られた口頭資料を用いる。

(ゆのき かおり, 関西外国語大学)

【C02】 新旧の資料に見られるコストロマ州のチャストゥーシカ伝承

熊野谷 葉子

コストロマ州は豊かなフォークロア伝承で知られ, これまでに多数の現地調査が行われているが, チャストゥーシカに関しては, 特に注目すべき資料として, 宗教哲学者パーヴェル・フロレンスキー (П.А.Флоренский) の採録による「コストロマ県ネレフタ郡チャストゥーシカ集」(Собрание частушек Костромской губернии Нерехтского уезда. Кострома. 1909) がある。ここには, 968 篇のチャストゥーシカに加えて採録地の情報や演奏方法, 歌の詩的特徴等についてのコメントがあり, 20 世紀初頭のチャストゥーシカのレパートリーとその演奏の様子を知る貴重な資料となっている。

フロレンスキーの序文によれば, ここに収録されているのは「チャストゥーシカ」の名にふさわしい, テンポの速い小歌のみである。彼はそれを更に区分して, 恋愛を歌う 4 行詩「ラウンドユハ (ландюховая частушка)」を典型的なチャストゥーシカとしているほか, 軽快な「踊り歌 (плясовая частушка)」や, 兵役につく若者とその周囲を歌う「新兵の歌 (рекрутская частушка)」, しばしば 10 行を越える「輪舞の歌 (хороводная частушка)」などを, それぞれ一群を成すものとしている。

ソ連時代とそれ以降に同州で出版されたチャストゥーシカ集では, 「輪舞の歌」のような行数不定の歌が見られなくなる一方, 2 行詩の「ストラダーニエ (страдание)」や, 語彙と内容の面から区別される「セミョーノヴナ (Семёновна)」「ジプシー娘 (цыганочка)」といった, フロレンスキーのテキストにはなかったジャンルが加わっている。また, 州内各地の 1910 ~ 30 年代生まれの人が歌った戦争を主題とするチャストゥーシカ集 (Вот и кончилась война. Кострома. 2005) 等を見ると, 20 世紀初頭に歌われていた「新兵の歌」に共通する内容と形式が, 第 2 次世界大戦を歌ったチャストゥーシカの根底にもあることが分かる。

これらの分類はもっぱら歌詞の内容と形式によるものだが, 同地域における音楽的調査では歌われるチャストゥーシカの多様な節とその名称との複雑な関係が報告されており, それを見ると, 例えば上記の「セミョーノヴナ」が際立って特異なリズムを持つことや, フロレンスキーの言う「ラウンドユハ」と類似の名称を持つ一連の歌が, 彼の指摘とは異なる形で残っていることなどが明らかになる。

報告者は 2007 年に柚木かおり氏と行った本会ワークショップにおいて, 歌詞と節, 身体動作の複合的な検討の必要性を述べたが, 今回はこれを実践に移し, 2010 年夏に行う現地調査の結果も取り入れながら, コストロマ州におけるチャストゥーシカ伝承の過去および現在について報告する。

(くまのや ようこ, 慶応義塾大学)

【C03】 ユーリー・ロトマンの記号論における「ロシア・ソヴィエト」

乗松 亨平

ユーリー・ロトマン (1922-93) の文化記号論において、ロシアやソ連がどのような特徴をもつまとまりとして明示的・暗示的に描かれているか、また、そのような「ロシア・ソヴィエト」のイメージが、彼の理論のなかでどのような役割を果たしているかを検討する。

ロトマンは70年代以降、複数の記号体系間の「対話」「翻訳」を理論の核にしていく。彼が晩年に提唱した「記号圏」は、そのような「対話」「翻訳」を可能にする場であるが、M. Waldsteinによれば、それは多民族国家・ソ連の隠喩となっている。しかし、ロトマンが「複数の記号体系」というときには、単に異なる国語が意味されるだけでなく、根本的原理を異にする記号体系が意図されていた。とりわけ彼が目にしたのが、言語的=約束事的=離接的記号と造形的=類似的=連続的記号との差異である。ロトマンがくりかえし論じた19世紀初頭のロシア貴族の演劇的文化は、この両者の「対話」「翻訳」を实践する点で重要だった。80年代のプーシキン伝・カラムジン伝でロトマンは、言語的記号に基づき、現実の生を連続的記号としてつくりあげる、「生の構築」というアイデアを軸に据える。このアイデアは、I. PapernoやA. Etkindによって、ロシア文化史の他の時代、とりわけ革命運動に敷衍されることになるが、ロトマン自身、テキストが生規範となる現象を、ロシア文学の一般的特徴としても語っていた。記号が現実在先立つ「ハイパーリアル」と化した状況は、のちのソ連=ポストモダン論が描いたソヴィエト文化の特徴でもある。ロトマンによれば、プーシキンやカラムジンは、現実とは遊離した記号を主体的に使いこなすことで、独自の「自己」たらんとした。これは、ソ連のポストモダンの状況のなかで、ありうべき抵抗のかたちを構想したものとも解釈できる。

ロトマンにおける、複数の記号体系間の「対話」「翻訳」という概念を、「ロシア・ソヴィエト」に引きつけて理解することで、彼の「ロシア・ソヴィエト」イメージのみならず、「対話」「翻訳」概念の可能性と問題点を考えたい。

(のりまつ きょうへい、東京大学)

【C04】 バフチンの「敷居」概念の時空間的側面について

大塚 淑裕

バフチンの文学理論はポリフォニー小説論とカーニヴァル文学論に代表される。しかし、この両者はまったく別個のものなのだろうか。そこでこの二つの概念を結び付ける共通の土台として考えられる、もう一つのバフチンの重要な概念である「時空間」に注目したい。そこで切り口とするのが「敷居」という鍵概念である。

「敷居」概念はバフチンにとってポリフォニー小説論の要素である「対話」との関わりから重視されている。この考えはバフチンの代表作『ドストエフスキの詩学の諸問題』(1963)で言及されているが、興味深い点はこの初版である『ドストエフスキの創作の諸問題』(1929)では「敷居」の語が見当たらないことである。

バフチンの「敷居」概念とは、この二つのドストエフスキ論の間で展開された時空間論に基づいたもので、冒険小説の時空間に通じており、あらゆる出来事が起こりうる場としての具体例から導かれたものである。特に「敷居」については「対話」をもたらし場として理解されている。

その「敷居」概念がどのように形作られていったのかを、時空間論の観点から見直していくと、「敷居」には時空間論の流れに基づいた1940年代の学術論文の主題としてラブレーへ取り組んだ背景があったと考えられる。その学術論文で「敷居」は展開されなかったが、その執筆直後のノート類から「敷居」の語が見られるようになる。それはラブレーに関わるカーニヴァル文学論で時空間論の役割を認めたバフチンが、以前に提唱していたポリフォニー小説論にも適用し、「敷居」という概念を見出したためなのではないだろうか。その結果、ドストエフスキ論の改訂の際に「敷居」はポリフォニー小説の時空間的な要素の一つとして取り上げられることとなったのである。

以上から「敷居」概念は時空間論によるポリフォニー小説論の見直しの成果であること、そしてそこにはカーニヴァル文学論を経た時空間論の展開があったことがうかがえる。バフチンのポリフォニー小説論とカーニヴァル文学論の根底には時空間論という共通の土台があったことが見て取れるのである。

(おおつか よしひろ、早稲田大学院生)

[C05] 20 世紀初頭ロシア帝室劇場のバレエとオペラのレパトリー

平野 恵美子

『帝室劇場年鑑』は 1890 年から革命後の 1919 年まで発行され、「ロシア演劇」「オペラ」「バレエ」「フランス演劇」のそれぞれのジャンルごとの上演内容の概要解説、レパトリー、上演日、アーティスト等が詳しく記された、革命前のロシア演劇を知る大変貴重な資料である。

本発表ではこのうち、バレエとオペラのレパトリーと上演回数に着目し、約 100 年前のロシア帝室劇場で、どのような作品が多く上演されていたのかという点について、その傾向と特徴を考察する。とりわけ「ロシア」を主題にした作品について、考える。オペラでは、《エフゲニー・オネーギン》《スペードの女王》(共にチャイコフスキー作曲)《皇帝に捧げた命》《ルスランとリュドミラ》(共に格林カ作曲)等、ロシアの作曲家による、ロシアを主題にした作品が、レパトリーの半数を占めていた。一方、バレエでは、ロシアを主題にした作品は非常に少ない。だがそうした中でも、ロシア民話を題材にした《せむしの子馬》は 1900 年代のロシア帝室劇場において、モスクワとペテルブルクの両方で、最も上演回数の多いバレエ作品だったのである。

ロシアを主題にした作品の上演と受容に関して、オペラとバレエ、またモスクワとペテルブルクの比較から、考察する。特に当時のバレエにおけるロシアの主題の作品がどのようなものであったか、明らかにしたい。

(ひらの えみこ, 筑波大学)

[C06] メイエルホリドの音楽的リアリズムについて—1926 年『査察官』の演出

伊藤 愉

演劇構造を露呈する手法を特徴としたメイエルホリドの演出は、1926 年の『査察官 (Ревизор)』(ゴゴリ作)を契機に、演劇の「再構築」へと向かう。『査察官』は、同時期に訪露していた W. ベンヤミンが「このときから反メイエルホリド戦線が張られた」と記しているように、体制との関係が緊張状態に入る転換期と捉え得る。『査察官』を巡っては、これまでにないほど左派・右派入り乱れての議論が展開した。左側からの主要な批判は、写実的な手法が際立ち、観客への煽動的働きかけが弱まったメイエルホリドの『査察官』は、日和見的で右派への「後退」であるというものだった。しかし、メイエルホリドの『査察官』は、単に「後退」としてのみ評価しうるものではない。その演出には、むしろメイエルホリドの演出手法の新たな展開として評価すべきである。

彼はこの上演において、彼がこれまで敬遠していた「リアリズム」の手法を取り入れている。彼の「リアリズム」の手法は、「音楽性」に基づくものであった。メイエルホリドは、演劇の音楽的演出(構成)を実現するため、当時の新技術である映画の手法を導入している。しかし、それは単にスクリーンを舞台上に持ち込むといったものではなく、映画の製作工程を構造として抽出・解体し、演劇の空間内に映画「的」手法として再現させるものだった。「構造の解体から再構築」という流れは、音楽のパートをオーケストレーションする作業と重なるばかりか、それまでのメイエルホリドの演劇活動全体を大きく包含するものだったといえる。すなわち、メイエルホリドの「リアリズム」は、見世物小屋や構成主義といったそれまでの実践を包含する「リアリズム」であり、自然主義的なそれとは異なる、極めて複雑な概念だった。

これまでメイエルホリドの演出は、劇世界の解体や身体性の強調がとりわけ注目されてきたが、それらを昇華させリアリズムとして提示しようとした 20 年代後半の彼の活動には、あまり眼が向けられていない。メイエルホリドの「リアリズム」の手法が『査察官』の中でどのように機能したか、さらにその演出を巡ってどのような議論が成されたかを考察し、20 年代後半におけるメイエルホリドの立場と試みを検証する。

(いとう まさる, 一橋大学院生)

【C07】調香師エルネスト・ポー 「シャネル No.5」の創造者

大野 斉子

帝政ロシアの香水産業

ロシアの文化研究で近年関心を集めているのが帝政時代の都市文化である。娯楽から製造業まで様々なテーマがある中で香水産業が研究対象として注目されつつある。

20世紀初頭、帝政時代のロシアには香水産業が栄えていた。ラレ、プロカル、フェレインなど世界に名をはせた香水会社は10をくだらない。だが革命とともにその歴史は断ち切れ、人々の記憶から失われていった。

ロシアの香水産業の命運は途絶えたかにみえた。しかしロシアからフランスへ亡命したわずかな関係者たちがロシア香水を現代へつないだ。その最も輝かしい遺産がラレ社の調香師、エルネスト・ポーの作ったシャネル No.5 である。

忘れられたロシアの香水産業と、現代香水の金字塔ともいべきシャネル No.5 の間にはまだ大きな空白が横たわっている。それを埋めるための試みの一端を紹介する。

シャネル No.5 のルーツ

シャネル No.5 は現在世界で最も多く売れている香水だ。1921年の発売から2010年の現代まで、実に90年近い歳月を生き抜いた魅力はどこにあるのだろうか。

シャネル No.5 は発売早々、調香師たちに衝撃を与えた。あまりに斬新なその処方、そして無名に等しい調香師ポー。そのギャップはシャネル No.5 がいかに作られたかについて多くの伝説を生んだ。伝説の一つにこういうものがあつた。シャネル No.5 はロシアのラレ社で作られた香水をもとにしているという説だ。この説は本当なのか。現代の化学者が行った検証結果をもとに、ロシアと現代香水の関係について考察する。

エルネスト・ポーの生涯とロシアの香水文化

1881年(1882年説もある)フランス系の家に生まれたエルネスト・ポーは、ロシア最大の香水会社ラレ社に入り、調香師となった。

その後のエルネスト・ポーの人生はロシアの香水産業の運命を映しだすかのようだった。帝政時代の香水産業の最盛期に活躍したポーは数々のヒット作を世に送り出した。しかし第一次世界大戦、ロシア革命を経てポーはフランスへ移住し、二度とロシアの土を踏むことはなかった。

エルネスト・ポーの生きた帝政ロシアにはどのような香りの文化が息づいていたのだろうか。ロシア香水産業はどれほど発展していたのだろうか。

エルネスト・ポーの数奇な人生とともに帝政ロシア末期のロシアの香水文化をたどる。

(おおの ときこ, 青山学院女子短期大学)

【C08】20世紀初頭のロシア文学における個性の問題 —ハルムスの作品を巡って—

小澤 裕之

ロトマンは、「1920年代半ばから、主人公の人格において個性の欠如が際立ってきている」と述べ、19世紀ロシア文学に見られた個性の多様性は同一性へ変容しつつあることを指摘しているが、当時の個性を巡る状況がいかなるものだったのかを検討したい。

ハルムスの1930年以降の散文作品には、無個性が顕著なグロテスクな作品が数多く存在する。このような無個性は非人間性という言葉で括ることが可能であり、ナヒモフスキーはその例として主人公の機械性を挙げている。これは明らかにゴゴリの伝統を継承するものだが、しかしハルムス作品の非人間性には、ハルムスなりの論理が伏在している。「ダニイル・イヴァノヴィチ・ハルムスによって発見された物と形」によれば、物の本質的な意味を露わにするために、そしてその結果、人間が物化=非人間化するのである。人間の物化は、すなわち無個性や機械性の印象を読者に与えるが、それはハルムス自身の論理から来る帰結なのである。

さて、20世紀前半のロシアにおいて個性という問題は、「新しい人間」とも絡んで、非常に重要且つ切実な問題であり得た。ボリシェヴィズムにおける、未来派における、社会主義リアリズムにおける、「新しい人間」。それらの内実がどのようなものであり、どのような異同があるのか、それを詳らかにすることは今回の報告ではできないが、しかしそれらの大まかな特徴として集団化、機械との融合、超人化等を摘出し、ハルムス作品と比較することは可能だろう。

また、「生きた人間」という文学的形象も俎上にのぼせられねばならない。これを巡ってプロレタリア作家と事実の文学者との間で論争が行われたのだが、しかしリベジンスキーの『ヒーローの誕生』(1930年)という小説が、この論争に幕を下ろした。内面的な悩みを抱える主人公の姿が、社会的な要請に反するとみなされ、「生きた人間」へのバッシングが巻き起こったのである。「生きた人間」自体は、文学的にごく短い間しか生き永えなかったが、しかしこの問題は、当時のロシア文学における個性を考える上での重要な材料となることだろう。ザラムバニによれば、より現実的でより心理主義的な個性の是非が問われたのである。

当時のロシア文学における個性の問題は、その膨張と画一化の間で揺れ動いたが、ハルムス作品の無個性や非人間性をその中に位置付けてみるのは興味深い試みとなるだろう。

(おざわ ひろゆき, 東京大学院生)

【C09】 Воскресные школы для билингвальных детей и детей-мигрантов в Токио - особенности, проблемы, перспективы

Сивакова Стелла

В последние годы, отмеченные активным возрождением церкви в России, воскресные школы здесь вновь становятся важной частью образования. Но исторически они давно занимают главное место в жизни русскоговорящих диаспор за рубежом и миссионерскую роль их в деле сохранения в этой среде русского языка и культуры трудно переоценить. В 2008-2010 годах также предприняты попытки проводить воскресные занятия в Токио при двух известных храмах - храме Николай-до Автономной Православной Церкви Японии и храме св. блгв. кн. Александра Невского Подворья Русской Православной Церкви - для обучения православной культуре детей-мигрантов и детей-билингвов из русско-, украинско- и белорусско-японских семей. В этой связи в настоящем докладе освещаются основные моменты истории создания воскресных школ в России (18 в.) и дальнем зарубежье (после 1917 г.); акцентируется внимание на основополагающих отличиях целей и задач таких современных школ, действующих на территории РФ и в иноязычных государствах; проводится анализ собственно учебного процесса на занятиях в Токио. По традиции воскресные школы ориентированы на воспитание детей в канонах христианской культуры, пробуждение в них религиозных чувств. Ключевой позицией в этом является обучение старославянскому языку, песнопению, иконописи и т.д. Возможно ли подобное религиозное творчество на уроках в Токио или слабое состояние русского языка заставляет изобретать новые формы обучения в условиях доминанты японского языка? Опираясь на факты и личную педагогическую практику в созданном нами Bilingua Class и в проведении воскресных занятий, мы делаем выводы: 1) занятия в Токио регулярно посещают дети только из очень глубоко верующих семей, а потому воцерковление их не представляется задачей высшей степени актуальности; 2) первостепенным трудом здесь, в конечном итоге, оказывается не воцерковление детей через христианские дисциплины, молитвослов и т.д., но, в первую очередь, обучение их основам русской грамоты, пускай и с непрерывным процессом развития речи путем обогащения ее православной лексикой, внедряемой в ее лексикон. В этой работе существует немало проблем, и здесь насущной потребностью на сегодня нам видится усовершенствование учебно-методических подходов в границах понятия русской лингвокультуры, - православной в своей основе.

(シヴァコーヴァ・ステラ, 創価大学)

【C10】 梅毒と開港場医療

—1860 年前後におけるロシア艦隊による梅毒治療—

宮崎 千穂

本報告は、幕末の開港場を舞台とする列強艦隊による医療実践が、支配規律システムとしての帝国医療の創出といかに関わっていたのかという問題を、特にロシア艦隊の梅毒に対する医療実践（予防法・治療法）に注目し、解明することをめざす。ロシア艦隊は、長崎のロシア水兵相手の女性に対し、他の欧米艦隊に先駆け日本で初めて梅毒検査（検疫）を導入した。十九世紀初頭頃より西欧で意識化され始めた「梅毒との闘い」は、特に十九世紀後半より二十世紀初頭に至る間には欧米や日本の帝国医学において重要な課題となった。幕末における長崎港でのロシア艦隊による「梅毒との闘い」は、ロシアの植民地（開港場）医学を形成する初期の医療実践のひとつであったと考えられる。

本報告では、主に、中国海域派遣艦隊（司令長官リハチョーフ И.Ф.Лихачев）の医療責任者である艦隊上級医師メルツァーロフ Д.В.Мерцалов（一八二七～九四）が著した「六十砲門フリゲート艦スヴェトラナ号の航海医学日誌」（『海軍論集医学附録』掲載）の中でも特に医療実践に関わる記述を分析する。一八五〇～六〇年代という列強艦隊が競って世界的規模での航路（市場・領土）開拓をめざし「極東」へも進出し始めた時期において、ロシア艦隊の医師たちにとり、海の上の限られた特殊な空間を生活環境とする兵士たちの健康をまもるといふことは如何なることであったのか。メルツァーロフは、東へ東へと地球を一周する大規模な航海中において、とりわけ、日本で「拡大」している梅毒に非常に強い関心を寄せ、その治療実践についても特に詳しく記した。本報告においては、メルツァーロフが当時長崎に設置されたロシア海軍病院において梅毒に対し如何なる医療実践を如何なるまなざしでもって行ったのか、数ある病の中で「日本の梅毒」をどのようにみたのか、そして医学的まなざしから描かれた長崎港の風景は如何なるものであったのか、といった問いを、ほぼ同時期におけるイギリス艦隊などの梅毒治療、長崎と同様にロシア海軍病院が置かれた箱館におけるロシアの開港場医療、ロシア海軍全体における梅毒への関心等も考慮しつつ、帝国医療の視点より検討する。

(みやざき ちほ, 名古屋大学院生)

【C11】 日露戦争に至る道第二部
—三国干渉と義和団事件

有泉 和子

19世紀末、欧米列強は、植民地を求め、争って帝国主義的体外進出政策を行い始める。

アヘン戦争(1840-42)、アロー号戦争(1856-60)に敗北し、実に14年間に及んだ太平天国の乱(1850-64)に疲弊しつつも、依然「眠れる獅子」であり続けた清国も、日清戦争(1894-95)敗北後は、列強の激しい分割競争の対象にされていく。

列強の進出に対抗し、改革をはかろうとする清国若手官僚による動き(変法自強派運動)は、98年西太后ら保守派により一掃され挫折する(戊戌の政変)。

列強の進出、特に鉄道、電信の敷設により、職を奪われた民衆にも排外機運が高まり、97年以降、度重なる華北一帯の干水害により、各地に、義和団と称する暴動・武装蜂起が起き、00年6月、20万とも言われる大勢力となり、北京に入り、公使館地区を包囲する。

ドイツ公使や日本公使館書記生が殺害されたことを機に、列国は八カ国連合軍を組織し出兵し、当初反政府であったはずの義和団を取り込み、その矛先を諸外国に向けることに成功した清朝は、列国に宣戦布告する。

義和団事件である。

一方、日清戦争に勝利したはずの日本もまた、講和条約調印わずか6日後、予期せず、露独仏三国の外交干渉を受け、獲得したばかりの遼東半島の放棄を余儀なくされ、面目を失う。98年、ロシアは、その遼東半島の旅順・大連を租借地とし、東支鉄道南満州支線敷設権を得、既に96年に得ていた東支鉄道本線敷設権とともに、満州進出の足かがりとする。

日本の「利益線」として、多大の犠牲の末、清国の勢力を排除したはずの朝鮮半島は、早くも95年7月、親露派政権がつくられ、同年10月クーデター(閔妃殺害事件)により一旦つくられた親日派政権も、96年2月、再び、親露派政権に取って代られ、朝鮮国王は97年2月までロシア公使館で過ごす。

この中国における複雑な政治状況下、日本は、三国干渉の屈辱に、「臥薪嘗胆」とロシアに対する敵愾心をつのらせ、一方ロシアは、義和団事件解決において、中心的役割を果たした日本に対し、警戒心を強めて行く。

日露戦争の直接の契機となる両事件に焦点を当て、昨年引き続き、日露戦争の原因を考えて行く。

論拠は、『日本外交文書』、イギリス外務省文書、ロシア海軍文書館文書、Красный архив 等。

(ありいずみ かずこ、東京大学)

ワークショップ

【D01】 トルストイとドストエフスキー再考

【趣旨】 同時代のストラホフ、シンボリストのメレシコフスキー、シェストフ、ジョージ・スタイナーといった多様な批評家が、それぞれの時代の観点からトルストイとドストエフスキーという二人の作家の類似と差異を論じ、ロシア文化論の重要な題材として扱ってきた。現代のロシアでも、たとえばイーゴリ・ヴォルギンなど、広範な資料を参照しながら両作家の関わりや類似・差異の問題を、ロシア近代史の文脈で具体的に展開しようとしている論者は多い。2010年の国際ドストエフスキー学会でも、ロビン・ミラーらアメリカのロシア文学者たちによる同じテーマのラウンドテーブルが行われ、両者の文学における「異化」の手法、『アンナ・カレニナ』と『カラマゾフの兄弟』の比較論、雑誌連載形式との関連における創作手法の比較などのテーマを論じて注目を集めた。同じくこの二人の作家に大きな注目を払ってきた日本のロシア文学界においても、この時代を超えたテーマをトルストイ没後100年の現代の視点から再検討することは、極めて有意義であろう。このワークショップでは、4人の研究者がそれぞれの関係領域においてこの問題の今日的な意味と展望を発表し、さらに会場との討論を行う。

明治文学におけるトルストイとドストエフスキー

諫早勇一 (同志社大学)

二葉亭四迷を中心とした明治末の日本文学におけるトルストイやドストエフスキーの受容と創作へのインパクトについて、実作とロシア文学観とのかかわりの問題を中心に再考する。

トルストイ／ドストエフスキー／バフチン

鈴木淳一 (札幌大学)

ドストエフスキーのトルストイ観、トルストイのドストエフスキー観を瞥見するとともに、「トルストイ＝モノログ小説、ドストエフスキー＝ポリフォニー小説」というバフチンの定義の実効性、波及力について概観する。

文学作品と戦争の記憶

越野剛 (北海道大学)

ナポレオン戦争やクリミア戦争がドストエフスキーとトルストイの創作にとって持った意味を『セヴァストポリ物語』や『白痴』を題材にして考察し、そこか

ら逆に文学作品が人々の戦争の記憶を構築していくプロセスを分析する。

『アンナ・カレニナ』と『白痴』：アナロジーとパラドクス

望月哲男 (北海道大学)

ともに福音書を下敷きとして、情熱、倫理、裁き、慈悲、責任、狂気、復讐などのモチーフを共有する両作品を、レトリックとくに類推（アナロジー）の用法とパラドクスの論理という側面から比較検討する。

以上の研究報告要旨は著者に無断で引用はできない。
Not for quotation without the author's agreement.